表す 感じる

かほく防災記者 1・2期生リポート

大川小の悲劇 伝承決意

仙台青陵中等教育学校４年　高橋　杏奈さん

高橋杏奈さん

石巻市の震災遺構大川小を11月11日に視察した。東日本大震災の伝承と防災の担い手育成を目的に、河北新報社などが開く通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」に参加し、大学生と一緒に大川伝承の会共同代表で語り部の佐藤敏郎さん(60)の話を聞いた。

震災前、学校の周辺は多くの家が立ち並び、活気のある地域だった。大川小も子どもたちの元気な声があふれていた。田植えが終われば、運動会をしていた。桜の季節には花見をしながら給食を食べていた。しかし、震災の津波は、かけがえのない日常とたくさんの命を奪い取った。自然災害の怖さを改めて感じた。

避難するための場所や移動する時間など、命を救うすべはあったが、震災発生直後に、避難の方法を決めなければならない事態に陥り、それらを生かすことができなかったという。一刻を争う状況で、正しい判断をしたり、素早い行動をとったりするのは難しい。事前に避難のルールを決め、訓練しておく必要がある。

これまでの避難訓練の体験を振り返ると、受け身がちだったかもしれない。あのときに自分が大川小にいたらどうしただろうか、家族がいたらどうしてほしかっただろうか。想像力を働かせ、自分で命を守る行動を考えることが大事だ。訓練で失敗し、そこから学ぶことがあってもいい。

大川小の悲劇の記憶は、年月の経過とともに薄れていくかもしれない。自分たちの世代が未来の世代に伝えないと、無かったことと同じになってしまう。佐藤さんは「大川小は、未来を拓く場所である」と言っていた。しっかり伝承できれば、未来の人たちの防災意識や、いざというときに命を守る行動につながるはずだ。

今からするべきは避難訓練の改善と、大川小の出来事を未来に伝えることだと思う。自分に何ができるか、考えたい。

◇

本年度3期生が研修をしているかほく防災記者（河北新報社主催）の1期生、2期生が、災害や防災・減災に関するテーマを選び、取材、執筆したリポートを随時紹介します。

大川小の裏山（うらやま）を見ると、津波の高さを示す表示の上に、避難できるコンクリート製（せい）のスペースがあった